

日本語のアクセント体系

鄭 賢熙 (ジョン・ヒョンヒ)

0. はじめに

方言関連の授業で鹿児島の方が録音されているテープを聞いたことがある。言葉自体の意味は置いておいて、話者のアクセントだけに集中して聞いてみると、それは北朝鮮の平安道(ピョンアンド)という地方のアクセントに似ていた。そういえば、釜山の人が話す日本語のアクセントは大阪アクセントに似ているとよく言われるが、これは興味深いことである。本稿では、日本の諸方言のアクセント体系を調べてまとめ、さらに韓国アクセント体系との比較もしてみたいと思う。

1. アクセントの定義

「一つ一つの語について社会的習慣として恣意的に決まっている、相対的な高低または強弱の配置」を「アクセント」(accent)という。このうち、高低によるアクセントを「高低アクセント」または「高さアクセント」(pitch accent)といい、強弱によるものを「強弱アクセント」または「強さアクセント」(stress accent)という。日本語のアクセントは、語(または文節)内部における高低の関係が決まっている高低アクセントで、高低の違いによって意味の区別をしたり、語(または文節)のまとまりを示す働きをする。

2. 日本語のアクセントの特徴

(1) 高低アクセントであり、「高」「低」二種類の拍の組み合わせによって語のアクセントが構成されている。

日本語では、「飴()と雨()」、「橋()と箸()」に見られるように、語における高低関係が一定しており、それが意味の区別に役立っている。ところで、高低アクセントと言っても、日本語のアクセントは高低二段だけという、きわめて単純な構成であるが、世界にはもっと複雑な高低アクセントを持つ言語がある。例えば、タイ語は、高、中、低三段の構成を持ち、またアメリカインディアン語には、最高、中高、中低、最低の四段からなる言語もあるとされている。

(2) 高低の変化は、主に一つの拍から次の拍に移るところで起こる。一つの拍は、原則として同じ強さで平らに発音されるが、稀に拍の内部に上昇調や下降調が現れる方言がある。例えば、京都方言や四国の高松方言では、「秋、雨、猿」などを のように発音する。

(3) 日本語のアクセントは、語の意味を区別する弁別的機能よりも、語や文節などのまとまりや切れ目を示す統語的機能の方が大きい。

例えば、次のようなミニマル・ペアは、アクセントによって意味が区別される。

アカ(垢)	カタ(型)	カウ(買う)
アカ(赤)	カタ(肩)	カウ(飼う)

しかし、このようにアクセントによって意味が区別されるペアが同音語全体の中で占める割合はむしろ小さい。

例えば、『角川国語辞典』(昭和55年版)には「せいか」という見出し語が17語収められている。今それをアクセントの型によって分類すると次のようになる。

セーカ 生花、生家、正価、正貨、正課、成果、声価、青果、盛夏、聖火、聖歌、精華、
製菓、請暇、齊家、臍下

セーカ 製靴

17語中の16語は全部頭高型に発音され、アクセントによる意味の区別が機能していない。このように、日本語のアクセントが意味区別に果たす役割が小さいのは、語にかぶさるアクセントの形式が単純で、わずか高低の二段で型が構成されているという日本語の特徴そのものにある。

では、日本語のアクセントの主たる働きは何であろうか。次の二つの同音連続の文の意味の区別を考えてみよう。

カネオクレタ(金をくれた)	ニワトリガイタ(鶏がいた)
カネオクレタ(金送れた)	ニワトリガイタ(二羽鳥がいた)

このように、同音が連続した文の意味が区別できるのは、言葉が意味を内蔵していることはもちろんだが、語または文節としてのまとまりを与えるアクセントの統語的機能が働き、文中の語や文節の切れ目を明らかにして、文の意味を引き出すからである。

以上のことから、日本語のアクセントは弁別的機能より統語的機能が大きいと言える。

3. 諸方言のアクセントとその分布

現代日本語の諸方言のアクセント体系は、

(ア) 京阪式アクセント

- (イ) 東京式アクセント
- (ウ) 一型式アクセント
- (エ) 特殊式アクセント

の四つの類型に大きく分けられる。このうち、京阪式と東京式は型の区別があるが、一型式は型の区別がないアクセントである。平山輝男氏は日本の諸方言のアクセント体系を次のように分類し、その分布を図に示している（図1）。

3.1 京阪式アクセント

京阪式アクセントは、東京式アクセントより複雑である。その代表として京都方言のアクセントを例にして図2に示す。

図1 全日本アクセントの分布



平山輝男『日本の方言』（講談社現代新書）p. 78より

京阪式アクセントの特徴をまとめると、次のようになる。

- (1) 第一拍と第二拍は、高さが異なる場合もあり、異なる場合もある。
- (2) 原則として一つの語(または文節)の中で、高い部分が二箇所に分かれて存在する型()はない。
- (3) 一拍語の名詞は、母音を長く引いて二拍に発音されることが多い。(注1)
- (4) 名詞は n 拍語に 2n(+ 1) 種の型を持つ。動詞は二種の型を持ち、二拍語は と が対立し、三拍語は と が対立する。形容詞は型が一種で、二拍語は 、三拍語は のみである。
- (5) 音韻論的には、高く始まるか(高起式)、低く始まるか(低起式) 「さがりめ」があるかないか、あるとすればどの位置にあるかが解釈の鍵になる。京阪式アクセントの主な分布地域は近畿地方の大部分、四国の大部分、北陸地方(新潟を除く)、佐渡などである。

表1 京都方言のアクセント体系

拍	型	語 例
1		(注1)
2	、	飴、牛、鼻、振る、着る、する
	、	石、音、橋、犬、花、山
	、	息、海、箸、降る、見る、来る、良い、無い
	、	雨、猿、窓
3	、	田舎、着物、子牛、間、桜、岬、当たる、運ぶ、明ける、腫れる、動く
	、	女、一人
	、	小豆、えくぼ、小麦、力、二十歳、頭、男、鏡、刃、宝、光、紅葉、心
	、	さざえ、兎、狐、雀、背中、鼠、ひばり、起きる、晴れる、隠す、入る
	、	つるべ、とかげ、二つ、二人、たぬき、後ろ、鯨、葉、たらい
	、	出っ歯、のっぽ、マッチ

(注1) 京都方言では一拍名詞「柄、日、手」等は母音を長く引いて、

エー、エーガ(柄) 、

ヒー、ヒーガ(日) 、

テー、テーガ(手) 、

のように二拍に発音され、すべての一拍語はこの三つの型のどれかに入る。体系的にはこれを二拍語と解釈し、二拍語の中で扱う。なお、四拍語には七種の型がある。

3.2 東京式アクセント

東京式アクセントの代表として、共通語の母体である東京方言のアクセント体系を図3に示す。

東京式アクセントの特徴は次のようになる。

- (1) 東京方言と同様、第一拍と第二拍が異なる方言が多いが、奥羽方言、新潟方言や鳥取県倉吉方言などには (低平型) が認められる。
- (2) 原則として一つの語(または文節)の中で高い部分が二箇所に分かれて存在する型はない。
- (3) 名詞は $n + 1$ 種の型を持つ。動詞は二種の型を持ち、二拍語は と が対立し、三拍語は と が対立する。形容詞は二拍語は型が一種で、三拍語は二種の型を持ち、 と が対立する。
- (4) 撥音、長音、および連母音「アイ」[ai]の「イ」など独立性の弱い特殊拍や無声化する拍の後には原則として「さがりめ」が来ない。

ゲンカン(玄関) パンヤ(パン屋)

トーキョーエキ(東京駅)

マイニチ(毎日) ケーザイブ(経済部)

- (5) 音韻論的には、「さがりめ」があるかないか、あればどの位置にあるかが解釈の鍵になる。東京式アクセントの分布はもっとも広く、次のようである。

北海道、北奥地方(宮城の北部を含む) 山形(東南部を除く) 関東地方(栃木、茨城を除く) 新潟、東海・東山地方、中国地方、九州東北部、四国西南部、奈良県十津川地方。

表2 東京方言のアクセント体系

拍	型	語 例
1	、	柄、蚊、血、名、葉、日
	、	絵、木、手、菜、火
2	、	飴、牛、鼻、振る、巻く、着る、する
	、	石、音、橋、犬、花、山
	、	糸、笠、箸、雨、猿、窓、降る、蒔く、見る、来る、良い、無い
3	、	田舎、着物、子牛、間、桜、つるべ、とかげ、岬、油、兎、当たる
	、	小豆、毛抜き、二つ、二人、力、頭、男、女、刃、鏡、光、むしろ
	、	小麦、五つ、心、動く、頼む、起きる、晴れる、隠す、白い、熱い

	、	えくぼ、さざえ、嵐、紅葉、朝日、命、ざくろ、姿、涙、枕、鳥、高さ
--	---	----------------------------------

3.3 一型式アクセント

一型アクセント方言の存在は、昭和初期より始まった日本の方言研究によって明らかにされた。学界側の報告は、服部四郎氏の「国語諸方言のアクセント概観」（昭和7年『方言』2 - 2）が最初であったが、同論文で宮城県仙台市方言について次のように述べている。

「仙台方言のアクセントを観察することによってきわめて興味ある現象を明らかにするのを得た。それは、俗に「アクセントがない」と言ってしまうところの言語状態である。いわゆる「単語」を中心として見るときにはその音節間の高低関係は全く一定していないように見える。例えば、「雨」という単語は「」と言うこともあれば、「」と言うこともあり、「」と発音することもある。土地の人は、特別に注意しない限り、このような音節間の声の高低関係の変化には全く無自覚のようである。」

この種の方言の地理的範囲を確定する調査は平山輝男氏によって着手され、昭和10年頃からこの方言についての認識が進んだ。平山氏は、一型式アクセントをその形成過程の違いから「尾高一型」と「平板一型」とに分類している。

尾高一型

型が統合して尾高一型になったもので、すべての語（または文節）の最後の拍だけを高く発音し、例えば、

飴・雨（） 鼻・花（） 橋・箸（） 男（） 朝顔（）
 のようになる。このアクセントには型の対立がなく、意味を区別する働き、即ち、弁別的機能はないが、話者には尾高一型という「型知覚」があると認められる。この一型アクセントは、鹿児島方言などの二型アクセントが一型に統合して出来たことから、この種のもを無アクセント（平板一型）と区別して、特に「統合一型」と呼ぶことがある。

主な分布地域は宮崎県都城市、小林市、鹿児島県志布志町、末吉町などである。

平板一型

話者に型の意識がなく、アクセントに型としての決まりがない。従って、「飴」と「雨」
 「降る」と「振る」
 「厚い」と「暑い」などをアクセントによって区別せず、自由に発音する。例えば、「男」は、、、のように様々に発音され、ときには東京方言と同様にともなることがある。比較的平板的に発音されることが多いことから「平板一型」という名称が付けられた。

「平板一型」はアクセントとしての働きが全く認められないので、普通「無アクセント」

と呼ばれる。また、このアクセントは多型アクセントの型意識が曖昧化する過程を経て、型知覚を失い、その結果、型が崩れてしまったと推定できることから、特に「崩壊アクセント」と呼ぶことがある。

無アクセントは、南奥地方（宮城・山形両県南部、福島）、北関東（栃木、茨城）、八丈島、静岡県大井川、福井市、九州中央部（宮崎・熊本・佐賀・長崎北部）などに分布している。

3.4 曖昧アクセント

無アクセント（崩壊アクセント）の周辺で、多型アクセントと接触する地域に分布する。アクセントの型の高低の差が小さく、型の区別はあるが、その区別が非常に曖昧で、無アクセントに近いものである。一般に話者の型知覚が鈍く、周囲の環境によってアクセントが動揺する傾向がある。かつては、明瞭な型の区別を持っていたものが、型の変化を繰り返しているうちに曖昧化したと考えられる。

宮城県北部の仙北地方、山形県最上地方、福井市周辺、愛媛県八幡浜方言、福岡・熊本の一部などに分布する。

3.5 特殊式アクセント

二型アクセント

型が統合してすべての拍数の語（または文節）が、最後から二番目の拍が高いか(A型)、最後の拍が高いか(B型)の二通りの型のいずれかで発音される。例えば、

A型...鼻()、鼻が(); 桜()、桜が()

B型...花()、花が(); 頭()、頭が()

のようになる。この二型アクセントの代表として鹿児島方言のアクセントを次に示す。

表3 鹿児島方言のアクセント体系

拍	型	語 例
1	、	柄、蚊、血、名、葉、日
	、	絵、木、手、菜、火
2	、	飴、牛、枝、鼻、岩、音、川、橋、振る、巻く、着る、する
	、	犬、池、花、山、糸、笠、肩、箸、雨、猿、窓、春、降る、蒔く、見る
3	、	田舎、着物、魚、衣、桜、さざえ、力、上がる、運ぶ、明ける、厚い
	、	兎、雀、朝日、油、心、姿、涙、枕、頭、男、宝、動く、頼む、起きる

この二型アクセントは、東京式の大分方言のような多型のアクセント体系が型の変化を起こし、似た型同士が統合して生まれたと考えられる。

このアクセントの特徴は、次の二点である。

- (1) 品詞や拍数を問わず、すべての語（または文節）がA型、B型の二種の型のいずれかに統合されている。
- (2) 音韻論的には「さがりめ」があるか（A型）ないか（B型）だけで解釈される。九州西南部の鹿児島、熊本西部、佐賀・長崎両県の南部、奄美・沖縄宮古諸島に分布する。

奈良田アクセント

山梨県南巨摩郡早川町奈良田方言のアクセントは特異なアクセントとして知られている。周辺の東京式アクセントが型の変化を起こして派生したと推定されているが、形式上は京阪式アクセントに類似している。このアクセントの着目すべき特徴としては一つの語（または文節）の中で、高まりが二箇所に出てくる型が存在する点が挙げられよう。

表4 奈良田方言のアクセント体系

拍	型	語 例
1	、	柄、蚊、葉、日...
	、	絵、藻、矢、尾...
2	、	風、牛、梅...
	、	猿、糸、息、秋、雨...
	、	山、石、歌、足、池...
3	、	桜、筏、形、兎、雀、当たる、明ける、挫く、恵む、赤い、浅い...
	、	カブと、鱈、錦、鰻、高さ、後ろ、鯨、歩く、這入る...
	、	心、朝日、命、動く、建てる、隠す、参る、青い、白い...
	、	鏡、霞、小鳥、小豆、女、頭、男...

4. 韓国語のアクセント

韓国語のアクセントは長短アクセントであるとよく言われているが、実は二つ以上のアクセント要素を含んでいる複合アクセントなのである。というのも、韓国の国語学者の李崇寧（イ・スンニョン）は、「現代ソウル方言のアクセント考察1960」という論文で、ソウル方言のアクセントに対する三つの見解（強弱、高低、長短アクセント）を示し、その後、イ・ヒョンボク（1973）の「現代ソウル方言のアクセント」においては「ソウル方言のアクセントは、アクセントの置かれる音節は長く、しかも強く発音される」という長

短 (length of syllable) と強弱 (stress) の複合アクセント説が主張されているからである。

4.1 韓国語アクセントの特徴

韓国語のアクセントの最小単位は一般に音節とされる。ところが、一音節内に声の高低変化が認められ、しかも声の高低変化のないアクセント型に比べてその持続時間が長いアクセント型が存在していることから、モーラを導入する場合もある。例えば、慶尚南道の大邱方言の「源」[ma : l] (言葉) は、音節内の声の上昇 (もっと正確に言えば、声の上昇と上昇の前の平坦な音調の存在) をその特徴とし、「源」[mal] (馬) や「源」[mal] (升) に比べてその持続時間が長いことから、一音節二モーラと数えられる。この点は東京方言と大きく異なる特徴である。

表5 大邱方言の一音節名詞におけるアクセントの型と意味区別の例

アクセント 型 語 例	()	()	()	()
_ /mal/	馬	升	言葉	
_ /e/			心労	子供

4.2 諸方言のアクセントとその分布

現代韓国語の諸方言のアクセントは、ピッチ (高低) が弁別的か非弁別的かによって大きく二つに分けられ、その分布は図2のように示される。



図2 韓国語の方言分布(アクセントを中心に)

4.2.1 咸鏡道型アクセント

北朝鮮北東部の咸鏡道、および中国の朝鮮族の多くの話者には咸鏡道型のアクセントが見られる。Ramsey(1974,1978)、車香春(2000)などによれば、これらのアクセントは、N + 1通りの型の区別を持ち、この点で日本語東京方言と同じである。車香春(2000)による延辺龍井方言のアクセントを例に取って次に示す。

表6 延辺龍井方言のアクセント体系

音節数	型	語 例
1	、	_ [mal] (言葉) ...
	、	_ [mal] (馬) ...
2	、	_ _ [saram] (人) ...
	、	_ _ [banul] (針) ...
	、	_ _ [baram] (風) ...
3	、	_ _ _ [iyagi] (話) ...
	、	_ _ _ [gobugi] (亀) ...
	、	_ _ _ [baguni] (籠) ...
	、	_ _ _ [bibaram] (雨風) ...

この図で () () () ...などと表記したものの音調は、実際には日本語東京方言の場合に似て、第2音節から高まることもある。しかし、やや強制的に発音する場合には、語頭から低い音調が続き、最後の一音節だけが高く発音される。また、それ以外の語頭で が二音節以上続く型の場合も同様である。

4.2.2 慶尚道型アクセント

韓国南東部の慶尚道には、全域に弁別性のあるピッチアクセントが存在する。慶尚道各地のピッチアクセントをアクセント体系という点から分類すると、まず、「多型アクセント」と「N型アクセント」に大きく分けられる。多型アクセントは、音節数の増加に伴ってピッチパターンによる対立の型の種類が増えるもの、N型アクセントは、音節数にかかわらず、一定の数の対立を持つものである。

慶尚道型多型アクセント

このアクセントは慶尚道の東部（慶尚南道では釜山を中心とする多くの地域、慶尚北道では大邱を中心とする多くの地域）に分布している。慶尚道型多型アクセントの一例として、慶尚南道の昌寧方言の三音節までの名詞を例に取って次に示す。

昌寧方言のアクセント体系の特徴を要約すると次のようになる。

- (1) Aのグループは、最初の二音節が高く、以降は低く発音される。助詞が付いた場合の音調も同じグループに属する。
- (2) Bのグループは、一音節単独形は長い上昇調で発音されることが多く、二音節以上になると、...というパターンで現れる。助詞が付いた場合の音調も同じグループに属する。
- (3) C~Eのグループは、どこか一箇所が顕著に高く発音されるもので、その位置は助詞が付いても原則として変わらない。
- (4) 1~3音節語の範囲内で存在する型の種類は、N音節についてN+2通りある。

なお、この方言のアクセント体系は、慶尚南道と慶尚北道のそれぞれの代表方言である釜山方言および大邱方言のそれらに比べてより多くの型を持っており、さらに共通する型をすべて持っている典型的な多型アクセントである。

表7 昌寧方言のアクセント体系 名詞単独形

	1 音節語	2 音節語	3 音節語
A	()		
B		()	
C	()		
D		()	
E		()	
A	mal 「斗」	more 「明後日」	mujige 「虹」
B	ma:l 「言葉」	saram 「人」	manura 「女房」
C	mal 「馬」	mori 「頭」	myonori 「嫁」
D		dari 「脚、橋」	minari 「芹」
E			majimag 「最後」

慶尚道型N型アクセント

慶尚道の西部一帯および全羅道の一部には、4型ないし3型の慶尚道型N型アクセントが分布している。このアクセントの例として、慶尚道型4型アクセントである全羅南道光陽市のアクセント体系を図10に示す。

全羅南道光陽市のアクセント体系のもっとも大きな特徴は、D系列(図19を参照)の音調で名詞に助詞が付いた形、あるいは用言の活用形などにおいて語幹がこの系列に属していれば、文節全体の長さにかかわらず、常に次末(penultimate)の位置がもっとも高くなることである。

• minari	minari - ga	minari - boda	minari - boda - nun
	-	-	- -
芹	芹が	芹より	芹よりは
• gidaryo	gidari - go	gidarim - sodo	gidari - rago - ggaji
	-	-	- -
待て	待って	待ちながらも	待てとまで

慶尚道型多型アクセントであれば、minari()の高い部分は固定していて、助詞が付いても変わらないが、この体系では、文節の長さが長くなるにつれて高い位置も後ろにずれていく。(これは日本語の特殊式アクセントのA型アクセントに類似している。)

また、それに伴って、慶尚道型多型アクセントの場合に存在した、
、
、
、
...などのように第一音節と次末音節以外の一箇所が高い型の存在が許されなくなる。

表8 全羅南道光陽市のアクセント体系

	1音節語	2音節語	3音節語
A	()		
B			
C	()		
D			
A	be「腹、船」	gurum「雲」	mujige「虹」
B	be:「倍」	sa:ram「人」	ma:nure「女房」
C	be「梨」	jimci「キムチ」	menori「嫁」
D		dari「脚、橋」	minari「芹」

5.2.3 一型アクセント

このアクセントについてはまだ研究が進んでいないが、日本語のアクセントにおいて弁別性を持たない方言を「一型アクセント」と「無アクセント」とに区別しているように、韓国語についても同様の区別を行いうる可能性がある。

末尾高一型

平安道などで分布するアクセントで、一つ一つのアクセント句の末尾の一音節を高く発音するものである。ただし、「接続形」と「言い切り形」の区別があって、文中で後ろに別の句が続く場合には接続形となり、句末を高く発音するが、文末や文中でも直後に休止や何らかの切れ目がある場合には言い切り形となって、最後から2番目の音節(次末音節)を高く発音する。

第2音節高一型

このアクセントは全羅南道に典型的に見られるものであって、一つ一つのアクセント句において第2音節がもっとも高くなり、以降のアクセント句の末尾にかけて下がっていく、というものである。ただし、語頭の子音が激音(有気音)濃音、/s/、/h/の場合には、第一音節から高く発音される。

5.2.4 無アクセント

ソウル方言は、無アクセントの典型と言えよう。この方言では、一つ一つのアクセント句の境界が必ずしも明瞭ではなく、二つ以上の句が連なって平板に発音されることがある。ただし、これは常に起きることではなく、特に文中での末尾を高くして取り立てられるように発音されることも決して少なくはない。しかし、そのようなことがない場合には、複数のアクセント句を平板に発音することができる、というのがこの方言の特徴である。

韓国語の諸方言のアクセント体系を表にまとめると、次のようになる。

表9 韓国語アクセント体系の分類

弁別的	多型アクセント	慶尚道型（釜山、大邱など）
		咸鏡道型（中国東北部も含む）
	N型アクセント	慶尚道型（慶尚道西部、全羅道光陽市）
非弁別的	一型アクセント	末尾高（平安道など）
		第2音節高（全羅南道の一部）
	無アクセント	（ソウルなど）

5. おわりに

これまで述べてきた日本語と韓国語のアクセントに関する事項をまとめて表に示す。

	日本語	韓国語
アクセントの種類	高低アクセント	複合アクセント （地方によって長短、強弱、高低の要素がそれぞれ異なって存在する）
最小単位	単語	音節
アクセントの特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・「高」、「低」二種類の拍の組み合わせによって構成される ・高低の変化は、主に一つの拍から次の拍に移るところで起きる ・弁別と統語の機能を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピッチアクセントを持つ方言の場合、左の日本語アクセントの特徴の全項目を共有する
アクセント体系の種類と特徴	<p>京阪式</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名詞は $2n+1$ 種の型を持つ ・一拍語の場合、母音を長く引いて二拍に発音されることが多い （例：テー（手）） ・第一拍と第二拍は、高さが異なる場合もあり、そうでない場合もある （例：息、飴） ・一拍内に声の高低変化が認められる （例：猿） 	<p>慶尚道型多型</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1～3音節語の場合、$n+2$種の型を持つ（4音節以上になると、$n+2$より多い型を持つ） ・同左 （例：dari（脚）、more（明後日）） ・同左 （例：ma:l（言葉））
アクセント体系の種類と特徴	<p>東京式</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名詞は $n+1$ 種の型を持つ ・第1拍と第2拍が異なる方言が多い ・一つの語の中で高い部分が二箇所ある型はない ・特殊拍の後には「さがりめ」が来ない 	

	<p>一型式 a. 尾高一型 ・すべての語の最後の拍だけを高く発音する(例: 雨、男)</p> <p>・弁別機能がない</p>	<p>一型(注2) a. 第2音節高一型 ・すべての語の第2音節がもっとも高くなり、以降は語末にかけて下がっていく ・ピッチが弁別的ではない</p>
	<p>b. 平板一型(無アクセント) ・話者に型の意識がなく、アクセントに型としての決まりがない。例えば、男は、 のように様々に発音される。比較的平板に発音されることが多い ・弁別機能がない</p>	<p>アクセント ・一つ一つのアクセント句の境界が明瞭ではなく、二つ以上の句が連なって平板に発音されることが多い ・ピッチが弁別的ではない</p>
	<p>特殊式 a. 二型 ・すべての語が最後から二番目の拍が高いか(A型) 最後の拍が高いか(B型)の二通りの型のいずれかで発音される (A型: 鼻、鼻が 桜、桜が B型: 花、花が 頭、頭)</p>	<p>一型(注2) b. 末尾高 ・文中で後ろに別の句が続く場合、アクセント句の末尾の一音節を高く発音する「接続形」と、文末や文中でも直後にポーズが置かれる場合、最後から2番目の音節を高く発音する「言い切り形」を区別して発音する ・ピッチが非弁別的</p>
	<p>(空欄)</p>	<p>慶尚道型N型 ・音節数に関係なく、一定の数の対立を持つ ・3型と4型の2種類ある</p>

(注2)は、同類に所属する型を比較の便宜上、二箇所に分けて示したものである。

今回の研究で、今まで掛け離れているとばかり思っていた両国のアクセントが、実は類似している部分が少なくないということが分かった。韓国の場合、日本に比べ、アクセントの研究があまり進んでおらず、資料が不十分で大雑把な比較しかできなかったが、この研究を土台に、次は両国の無アクセントの研究を進めていきたいと思う。

参考文献

柴田武 外 『日本の言語学 第2巻音韻』大修館980

杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育 第3巻』明治書院990
山口幸洋『日本語方言一型アクセントの研究』ひつじ書房998
飯豊毅一 外『講座方言学6 - 中部地方の方言』国書刊行会998
平山輝男『日本の方言』講談社現代新書1968
日本放送協会編『日本語発音アクセント辞典改訂新版』2001
金田一春彦 外『岩波講座日本語1 - 方言』岩波書店1977
福井玲『音声研究 第5巻韓国語のアクセント』2001
曹延煥「韓国語昌寧方言のアクセント体系」(福井玲編『韓国語アクセント論』所収)2000